東書

西郷隆盛一代記

羽田冨次郎著

四

A446
6

羽田富次郎編輯
村井房種圖画
真書

西郷隆盛一代記 四

明治十一年
五月四日 御届
浦野氏板

再ひ説教も勇天ハ師の坊ず忌日終て後寶父の仇を打
んと布施弁天ふ丹情を抜出昼夜念誦奉ること三七廿
一日ふして天女も感應在ましふふ満る暁ふ至り
勇天神前ふ在りて尚心信弥増るゞ折節空薫の香室
馥郁として御戸帳の自ら巻揚し天女御声爽らふ汝一
度当山を去り水府の駅路ふ趣向ハ二勇ふ逢ふて幸ひ
を得ることあり必ず疑ふこと勿れ於此後を示んと宣まど
も是ハ天気をゆらも道理ふあもべ此後ハ爰ふ止まる也
と御声の耳根ふ止まるよと覚て夢ハ覚ふ勇天奇
矣の思ひをなす是ぞ正しく天女の理現我ふ霊夢を授

け玉ひ此後の吉事を告玉ふい最在難し尊やと祈心信
弥増て祈念怠ぢも勇天ハ夢の告ハ一日も早く水府
の方ハ旅出なさんと村の者ハい諸國修行と言ふらし
当山を村長ハ頼こて弘化四年の秋住馴し希施のさと
を発足なし只管常州をさして急ぢり愛ハ又藝者ハ
志野ハ先つ頃茂木浦重藏ハ謀を計らぢも仇の手掛り
を聞知りて則ハ其場ハ討んとまどる暗の夜の争ひ
ハ仇人を矢ふのくら剰さへ持る刺小刀をお落さを
皆散くとなりしうび無念乍も後の日ハ又詫をべも在
んと思へべ彼君の若や妾をお捨て房の当り行玉ふと

偽り多き重藏が口より聞しとるをべ虚言いつりと
ハ思へども斤心ハも拙りなる終踏迷ふ癒の闇やくの
夜今ハ明ぬをども爰ハ鬼越山懐ろ行悩くなる足引の
山坂越へて遠くも来ハ福住屋の若者　駕籠を釣して
あくぬ此呼ハ来りて小志野を見るより大ぢハ悦ぶ
うどの内ハ入一早く我家ハ戻りて主人ハ斯と知らせ
しうび主人も殊の外悦びて小志野ハ向ひ夜前如何成
子細在て我家を家出せし其始末を問ひなをべハ小志野ハ
包まで重藏ハ欺しなるさを鬼越迫連行をしを詐をべ
元より小志野ハ自拵なをべさまで是を咎もやらぢ其

儘ふして過ふるり小志野いつるもの如く客人の多く一日のとなん甚く酒ふ強らるして其香を少し醒さんとるん
ドふ寄て吹く風ふ酒の機嫌をさるさんと斤手ふ觸し塗骨の團扇ふ招く秋風を暫時い肌ふ入ふり抑此福住
家ぶ樓閣なる囲の外もい下絶の利根より續きし美奈の川迚其向ひを小萩が岡と云櫻木の最多し春い花見
ふ瓢簞を開ゑ夏い岸辺ふ川獺ゆし秋い古松の元ふ茸狩ゆして戯游ぶ者多し麦ふ六七名の生徒等酒汲うと
し奥なる抄一囲の旅人其辺りを行ぶしぶ忽生徒高声ふて旅客無礼とるまをとるるるとるるるの奥を妨

げ知らぬ顔して過行い武士ふ似合ぬ無礼の振舞扶拔
なくべ此呼一歩迚も去るとるらぬといふを聞くより
朝笑ひ某しいるで御辺らふ無礼をるるせし覚のるるを何
迚斯迚咎めしゆといふを聞よを皆一同覚へるるとい
法外なり見らるし如く今の日い我輩の茸狩りふ奥を
添ぬあらくを出して此当りの地上を求め常いとるあ
ゑ今日一日我くどるがあるひし地中ふ生ぜし松茸
を心るあらぬ踏去だら描ぬで過行を嵐のゆふゆ輩
でる笑ひ顔して通さんや福大黒の二俵もとる汝も武
士の端なゑび物のよしも知る由あらんふ扶拔無も通

りゝハ我輩を輕節ゝ生りぶゝと見下して一言半言の詫をもなさに行えとなるハ奇怪千万いざ尋常ゝ勝負なるゝゝん地上ゝ平伏なゝ三拝なさば免して呉んとあつとり巻て責めなゝば是思ひも寄ぬ青侍の難題某道を急ゝ付終過て御辺ゝが奥を破りゝ無調法最罪深ゝ當りゝなら其段御免ゝ玉ゝなゝよと只管ゝとそ詫なゝば我輩もうゝるゝ書生等ハ詫なゝ斗りでとがなむなゝば我輩もうゝるゝ上詫言なるゝんと左右等ゝ取り拔り土足ゝ丁度蹴返なゝ是ハ狼藉と身を捻り瞪うひ掴んで三間斗りゝよと投たる手練の早うゝなるわとりつゝゝ後より擇挹を振り解き向ふゝ投ゝ腰車返へしゝ書生等ハゝうと一同討拔るを右手左手ゝ投付しハ秋の水の巢ゝ呉ならば誰ゝ一人及ぶゝなるゝとふゝり合短き日陰をついやせゝと私言なゝら行んとなるを一固の大丈夫四方傍より旅客暫く待玉ひ先前よりの御辺ゝ手のうち驚なへなる御働ゝ討とゝ者ハ我朋友此儘御辺を見遁なら某ゝ友ゝ義無ゝ似とり右士の仇ゝ某ゝ一刀御辺ゝ糸なるといへハ莞と笑ひ是ハ勇気能君ゝ義心好ゝ任して一勝負のて仕つると言よりも銭元遥ゝ拔發ゝ互ゝ打合切先ハ陽炮の海

上ふひらめき登り新月の影水ふ流るゝふ異ならば暫
時の突戰秘術を謁し雌雄分ちうゝ見へる拆忽然
うゝて十三四の童子身ふ八葉苞を脊ふら荷ひ右手ふ
ハ柄杓を携へて真一文字ふ駈来り二人切合其中ふ怨
げもなく割て入止んとなを両人ハ拆切結ぶ切先の
箭こ合を見るよりも童子ハ手早く着しわる袖ふ羽
織を拔くよりもひらりと双ふ翻つ飛鳥の如く身を
踊らせ去らうと踏へて動ろさぬハ凡人業とも見へざ
りき其時二人ハ気をいらちいらぬ童子ゞさへ立怪我
せぬうちふ退れ〳〵と虽ども更ふ身動なさばらゝや退

とぬお二人さん如何成意恨ゝ知らゞども布施野の里
ゝら遥こと神の教ふ気もせゝゞ通り撫りゝふ萩ゞ岡露面
も知らぬ且那方危ハ白双の真中へ飛で飛込向ふ見ゞ花
野ふ狂ふ蝶ならぬ紫菀剪草乱髪頭小坊主ゞ根ふ漆ふ野
辺の撫子ゞ乳房雖〻斗ふて此場の出合ふ立入るハ出
過た奴と御叱も兼知で飛入蜻蛉追ひ今日ハどとふて行ゑ
暮ん神の夢を心ふ念ゞ拔察りまるありゝらふ計ぞ
出合ゝ此争ひ薄の穂先秋風ふ落花微塵と切結ぶ女郎
花なら大ゝと除ても爰ゝ通ゝふゞまゞ味噌萩の苞
でも男郎花なら見て居ゞば如何なる恨ミ葛の葉の其

争ひ寄りて勇天二勇の助け寄逢ふ

元末ハ知らもども此場の出入ハあるまじさん此小坊主
ハ呉竹の双方共ハ意趣節々〜笹葉ハ落る我なるぞよ
ぞ御報謝下さるべし〜と聞より両人頭を振り元より両
人意根迚も在ハあらもど義ハ依て計ぞ此場の出合と
なり武士が一旦秘わる刀血を見ぞ鞘ハ納んやと聞よ
り又も返答〜斯歴〜の武士へ我ら言ハ孔子ハ説釋
伽ハ説法なるハ似るもど血を見て支を納るならいで
ら我ハ及んや此中人ぐ不兼知なら我ら先〜討果ト
其後切るも突るも〜御勝手次第ハ勝負を去るまじ
斯言我が父と云るハ元長州の人にて在篠原藤六ぐ忘

迷身同名勇天布施野の野ハ成長なり兵才天の霊夢ハ
寄水府の方ハ趣向ぐ勇士ハ逢ふて幸ひありと夫を頼
の力草野辺ハ争ふ御両所の其刀風の勇ゝ〜是ぞ天女
の道引〜勇士ハ〜ハあるならんと我を忘れて口さ
も鈍らぬ身ゆて支へ立撞とする身ハ御両所ハ命ぞ上
て一大事明〜〜うへで只管ハ御願ひ申とあるぐ先一
且の恕りを治め双方共ハ此刃ぐ風ハ引きて玉ゝと
右と左りを伏拝めぐ両人今ハ持餘〜斯迚童子ぐ頼ミ
しなら我ハ〜もあるを御辺ハ如何ハ某〜迚も心ハ同ド
貴殿と我を斯迚ハ見捨てことを頼むといふを無下ハ

捨るハ武士の本意なるゝび我より引ん御辺も引るゝら
某も卒迚頼て出入さんと刀も鞘ふ治まゝび勇天ちゝと横
手を討実ふありがゝ迚ハ両士のめくゝろく対解主ひゝ
ゝらば卧竜の誉より香しゝ君御所の御名こそきゝ
まゝ〳〵と問ひゝまゝび斯成らんハ某ゝ迚会ハ何とゝ
包むべゝ我社ハ長州産ふして桂小五郎とりゝる者と
ゝゝより旅客ハ客を改め扨ハ御辺ハ聞及ぶ桂氏ふて
在るゝ斯言我ハ薩ゝの国延岡の産ふして西郷吉之助
隆盛と申者そゝゝゝハ諸國修行ふて君ゝ雷名聞及ひ
朝暮對面ゝるさんとゝの縁の熟さゝハあゝふ月

日を送り〳〵ふ計を出合今日の對面まらねゝとゝハ言
なゝら是まで名せ〳〵無礼の段御免〳〵るひとゝひゝを
べふ五郎急ふ礼をゝく〳〵是ハあのひきや聞およぶ西
郷氏ふてゝまゝゝ某〳〵ゝを貴殿とゝるで君ゝ勇
名藁〳〵月頃ゝりひ〳〵夕辺の夜丁子ゝ〳〵らのゝちけ
るハ今日ゝいめんの知らせゝと早くゝも解勇士と勇士
五ふ席を譲りゝふ其時勇天左右を見ゝ〳〵りゝる意
味敷英勇ふ巡り逢ふのゝも天女の道びゝあらゝゝこゝを
〳〵尊やゝ我大望ゝ程近きゝと勇立ゝる其面さ〳〵ふ五郎
きゝゝとゝゝ守り汝勇天とゝらん年端ゝ行ゝ歎苦を忍

を親の仇を討んとなれど至孝いうでう見捨んや不及ながらそもそも助太刀なりて得さきくとと勇天いまを大事とも明さぬ先小奇密をさくもちどろもなりながら問ひくるゆう君如何ふして我上小仇そもありしと云そをいうふしてきろ〳〵めもと問ふを答へて打笑ひ其不心いたも至極そもそも先小游園少て計らひ藝妓ゞ物語り小親の仇を討んとなれば弟ありときてつらゞ今又汝ゞ言葉のそも〳〵小父を篠原藤六といひしをきてふ先の夜小藝妓小志野ゞ物語りと露ちがるべさる父の名の名字も恒小篠原とときてそもそも汝こそ藝妓

小志野ゞ弟と察せ〳〵まてふう〳〵迫も白地ふも問ひけると一く聞て勇天ハ愕然として言ふるゆう我幼なる頃よりも親兄弟の縁薄く姉うへあるとハ覚えどもおもさ〳〵さへも定めへぞ過越方の雪の夜小父諸とりふ消なんと思ひふるふ思ひきや今又此世ふあり〳〵とい枯さる梢ふ花咲ときてきふ増る我幸ひ君何をふて逢ひみ〳〵や教てわぐといひける折花の盛りも秋草の姿容も志わち〳〵錦の裾秋風小吹返〳〵あへぎ〳〵げい〳〵や小志野ハそ〳〵り来てのよるうう〳〵や弟よと涙ゞ小暮て泣沉と勇天不意のことりて誠〳〵らぬを

もゝちなるべ小志野ハ早く肌ふある守俵を取り出し
讀て聞せハ日月も父ゞ家名も替らゝハ疑ひ晴て勇天
ハ扨こそ御身ハ姉うゝと絶て久しゝを對面ふ兄弟手
ふ手を取ろゝ〳〵泣よ里外のこゝ〳〵其時桂小五郎ハ
小志野ゞ爰ふ来りしをいと否ケしくありしものゝらら
小志野ハ早くも名しゝゆゝして其御不心ハさるこゝる
ゞら妾ハ先小客の席ふ招うゝと常ふ好ね酒ふ強らゝを二
階ふ上り連子先酒の機嫌を醒んと秋吹風の便りさく
無身悲ゝ君ゞと思ひ續ろて居る折ろら小萩ろおろふ
あらそひの合手ハ君とゝ〳〵ものゝらら覚束ろゝも走り

来て今又君ふ逢うとろ弟浜ふめくりあゝよろこび
とふ増るものゝと嬉し涙ゞふ暮ふる時吉之助ハろ
さちらより小五郎ふうち向ひ御辺ハうゝて此女子を
見知りし者ふてありけるろとハふを聞くより小五郎
ハ打笑ひつゝ去るゞよ是ハ藝妓小志野として是成童子ゞ
実の姉身ハ賤敷唄女なるゞ我ふ大事を打あろし親
の仇を討ん思ふ其心根の健気ふ愛て不及乍も某しゞ
心を添る此節女君逢ひ見しハ今日ゞ初て以後ハ御見
知り置を玉ひ情を添ひて玉うるとハふ端聞ゝて吉之助
ふ小志野ハ早くも礼を述見奈らるも恥ケて敷妾ハ

西郷桂藤
田と會し
て小志野
兄弟と憐

二人の兄弟ハ幼なきよりも幸なくて父ハ過し雪の夜ふ人ふ人手ふ拭り兄弟ハ雪月花と散くふ生死の程も定め得ぬ行衛知らぬとなりしより若や此世ふ存命して成長なりなば何の日ふ迴り合して王孫と朝夕祈る甲天さなる其甲斐あらて弟も十五童子ふ早近く男なりせし面ふけを見る付ても悦ばれ君御両所の御威勢ふ出入のあり元末ハ憚ふ夫とハ知らぬども妾が爲ふハ能善根世ふ言結ぶの神のらそひ祭此末ふ兄弟を救せなひとふ志野勇天西士を神と敬へば西郷始終を聞終り実ふ兄弟が成長なる歎苦のうちふも復仇の仇を

討んと思ひし心根某し感ふ堪ねぬ頃て吉相門出を祝し至孝二人り餞別なさんと懐中探りて刺刀を取り出し是此品ハ子細ありてふと某しが手ふ入ど世ふ珍らしき一品なれば是ふて仇を討おかせ両人望を果さんとよと渡さを勇天ふ志野ハ手ふ取て戴ねてしかう見つ不心晴ぬも居る折ふ戸聞せし小五郎ハ此も是を託と見つ西郷氏ふハこの一品元より御所持ありなるふ似寄の品ハあるとしりくとる世ふ類なき此一品漢の武帝が出世鯉毛彫とあせし其刺刀元某がてふありて藝妓小志野ふ譲りを今又君が手ふ入り

ハ如何なる子細と問ける時藝者小志野ハ聞やく君の疑念も断りならぞ是皆妾が奉骨さるひとのそふおよひしりなりさるふ君より賜りて肌身ちなさろ守りしがその後絶てあとづるのなるこ悲こ朝夕ふ空を詠めて立暮を我身一ツの秋なりと初うりうるふ言づてを頼母司とこうるもり衛士の焚火の暗き夜ふ是ハ戸ろ罪の崇りふや曲もる人ふ立るさるて人も通ねる山懐ろ鬼越とうふ連行て仇ねく妾ふ言寄るを君ふさまつる刺小刀ふて偽ー討んも女業甲斐なくこるなりとそあるを小社の内ふ人ありてといふさるこうて吉之助投

さいうくいふ某ーと聞より小五郎横手を打是ハ思ひきや某ーも其夜計ぞ私用ふて夜を深草の茂こをそけ鬼越峠の庚申堂暗きふ紛れを争ひー君小志野とハ露あらはを夜いうべ玉の闇雲ふ只曲者と思ひー迫突出を刺小刀を甲斐なくも討落さるをー其時ふひろひー主ハこの隆盛再び御身ぞ手ふ入も小五郎大人の志ー天道孝子を捨玉ふべ元ふ返へりー其刺小刀今あらるめて指りどを

といふを小志野も勇天も押裁ー時こそふ小五郎共ふうちよろこび実ふや喧嘩ハことばのさるふ小萩がおろのあらそひも双方とも晴こうる秋の大空さよらろ

ふ志ゆびよく仇を討あらせ拮梗のありハ古郷ふうるゞるゝ蘭鈴虫の音も勇能凛〻として西士ハ兄弟をきく〻ハ小志野勇天ハ其恩義を拝悦しひさたらいさ〻〻折先前西郷ふ討悩さる〻一両輩の書生ら早くも戻りて喧唄の次弟をきらせ〻ハ同友の隊長藤田小四郎橋場小主水千草の太郎なんど大ひふいた〻ぐんとりて其旅客をうちきくぐんとあるとり刀ふうけ来きバさゝや小五郎吉之助ハあらそひる体みもあらぢさるもむつ〻きて語らひ居さり〻ハ血気の壮士等いゆさらふ張合稜てうてだむをふ五郎見るより

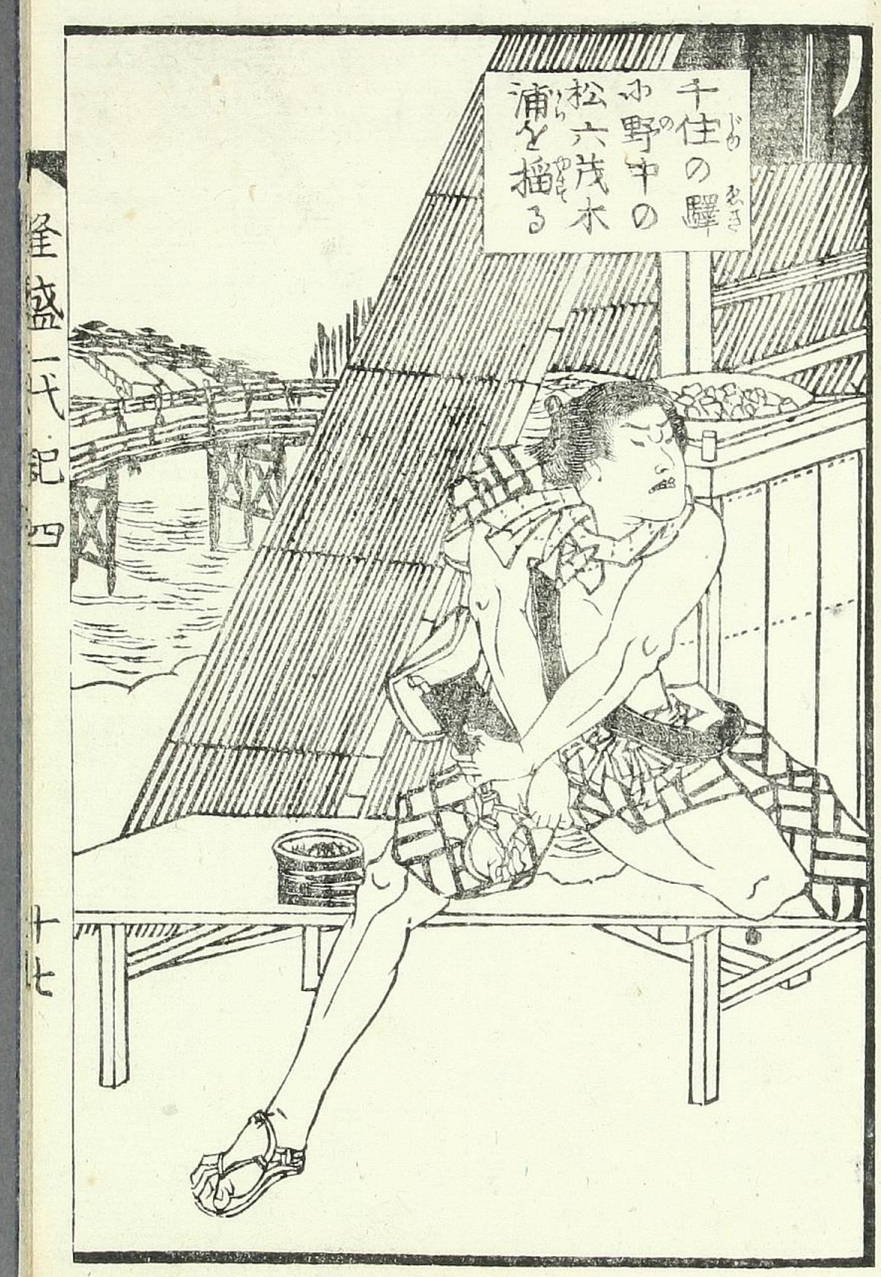
ゑ〻舎某〻先ふ手ひ〻ハ当世其名を東ゑ西郷大人ふてあり〻ゑゞ御辺らもうちまゆゑ自懇のゆどふ致さんと思ふ折ゝら招ぎて早くも爰ふ来りんとハ願ふてもゆゑ幸ひゆりとくちうぐゑふゆり玉ひと左右の方を見返ゑバ皆一同ふ容を改め西郷初め藤田も共ふ彷對面の挨拶終りて藤田小四郎言けるよふ某〻西郷氏ふ一盞を差上度思へども爰ハ山野の小筱ゞ岡饗應をゞもあらぎゑハ爰より所も程近ゑ福住楼ふて麁酒一盞んを奈らせん誘迎てゆゞて進めゑとども西郷否むを聞入ゆ〻桂もきひてきくめ〻ゆゞいるむよよ〻も

なり其意ふまろして誘引るあとふ續きて勇天小志野
こゝなうちつゝて福住の樓閣さしてのがりりくて
おの〳〵坐定りくとべ香肴の美酒山海の珍味配膳所席
まで置ならべその後へ盞を順逆ふ巡らし数盃をうる
むけこゝ書生らへ酔ふ泉ゝて合方ふ伴ことおの〳〵卧
戸ふ入ようるとゝ西郷桂氏へあるり小心を屹度付藤
田小四郎千草橋場ふ向ひ小志野兄弟ゞ仇討のことを
あら〳〵ひるさらふるの〳〵しろべ藤田へいつゝもさらこと
こゝ当世の義士ふちるるらゝとべ兄弟ゞ孝子
のわどを感心なり〳〵こゝ快よ〳〵請合てるれ仇の実所を

探んと宋談数刻ふ時をうろ〳〵秋の夜なゞら更行ふ寐
るるもなり〳〵ふそのよをあろ〳〵早やきぬゞとなりくと
も小志野へなわも人との教ふまうろて〳〵ふとゞまり
仇の行衛を探んと日毎夜ことふ客人の席ふ招うと四
方山の咄〳〵のうちふ気を配り心ふあらぬろうぞいも
うざを扇へもやゞひの仇を討すく〳〵ありんのく外ふ多
念もなくりくを然るふ又弟勇天へ西郷桂氏の推挙ふよ
り藤田小四郎ゞ門ふ入恐敵親の仇を討んとおりくべ兵
学ふ心意を砕剣術ふ綱磨きるとこあん志よく〳〵をと
ゝ日ねもゝ夜もゝゞらなりくとべ師も又彼ゞ大望の

あり〻身なりせば一入他の門弟ととなりて不便ふ
あるひよう〻教へ道引ハ切瑳琢磨の功を積しるハ藤田
も勇天が刀わの上達せ〻と見て是ふてハ如何なる仇
ふ出逢ふともあちやおくとへうるまゞと思へど今ふ
勇天が仇の在所ちとざるとハ藤田弥〻気をいらちて仇の
手がりを求んと門弟数多と諸國ふ走せ此所の盛り
場彼所の祭り人立多ゑ所をたづねつゝて辻裏〻ふ至
る迫藤田が奸者と入置て去のびしゝふさぐりなり然
るふ懸返りて鴈なゑとうりちやその年もさちくとて
明とい年号改り嘉永元年新玉の春をむく軒端ふ来

鳴鶯もいつ〻しゝ梅のあとろびて春色中よゆく催ふし
りん深谷の氷解初て乙女が雛を祭るてふ櫻もちりて
菖蒲吹軒端ふうけ〻鈎去のぶなが月ふ風りんの音
も涼しゑさぐ虫のうらうるしくも秋ぞ来つゝあゑまど
忘る白きゝの早初霜の降くる其年さくも臘月の季
冬の空とゝなりうとゝバ人のとゝろもおのづらせとく
とゝる往来の行来とぐつゝね陸奥の驛路ふうる千住宿
旅人の出入大橋のあるとふ一家の見世を開ゑて数の
貴物をあゑならべみちゆ〻ひとをいとゝせるいと
ふぐとゝゑ茶店あり〻の頃四十のあるむをさだし


千住の驛
小野中の
松六茂木
浦を揺る

休

顔ばかり一曲見ゆるものざれのうぐるふこうを
組しゝ馬うるさていとあぶゆる者大ぐあげて旬る様
うらひうゐしてうけ合ハようふちゞけてぐうゝと口
うら泡を吹出し眼玉をぐてべろ〳〵と人を絡うるも
くぞうわうふの横文字うるらゆくうんうふあとゞひ
わゝいてハ節季き冬の日ぐくるいうんうる足の暗くゐる
過し雪の夜仕置場て人をゆやゆるそのうくふ常陸の
國の山中ふ藝者小志野をつり出させむゞ骨おらゝる
そのうくふ当身で我をあひ拂ひその場ハむゆくうらら
へども真身をゝあうてうゞつけゝ胡ゞのちいふハ非ぞ

とも野中の松ゞ見ときハ太い根古のうるさんゞまるゞ
りくるゝ罪咎を今迄ゝも包ゝしゞ分まくゞさけべ
是非ゞねく恐乍とくらゝるうるると其場を立て出んとも
るを早くも袖を引とらくく是ハ早まるゆ野中の兄貴我
とて汝ふ其あうくとゝより譲ちづゆゝども庚申堂の
くらゝより終ふ其後便宜をゝゞ今日計ども逢よこそ
幸ひ日頃の報ひを得させんと爰ふ貯ひの金子ゆうゝを
べ今ぢゞ〳〵汝我と同道して東の方ふ歩をまげよらゝを
まる人ふ訪ゝべ数多の金子をあさうんとゝくべ野中
ハうゝべ振り是ハことあらうるちやゞんゞ例の扛言

寄言ふもある謀りて是をつきいざ〳〵道ふちつさり
討たゝ〳〵跡腹痛ぬ大仕ごとそのてハ喰ぬ今ゝで金
をさらりとまゝ出をゝだがさぞべゝふでも訴人をする
といふを只管引とらゝ〳〵武士ぎんてふ刀の手前へ両腰
汝ふ渡をゝ〳〵と伴〳〵来をよゝ〳〵支ふて同道をゝ
ゝをへゝんぢも道の疑ひを思ひ〳〵ゝけゝと両
腰を投出〳〵まべ松六ハ少〳〵疑念も晴ゝゝん両腰取て
己と帯〳〵さらべ金借所迚我同道致さんと云を聞より
重蔵も打悦びて其家の内ふ酒食の代を拂ひつゝ二人連立
出んとするふ冬の日早く暮果て落葉交りふ降る雪の北

風肌へを通〳〵ゝん道の歩ゝもゝをゝ中ゝ〳〵ふ〳〵て
東ゝもゝわど近ゝ千住ゝる仕置場ふゝゝり〳〵ゞ極
月の夜半のものさびし〳〵中ふべのまゝの赤もゝ〳〵ち
ふゝびあとある山つちふ野中ゝゝあ〳〵とゝをゝんつま
づくゝとゝを重蔵ハゝ中〳〵ゝゝるのこゝりゝとゝら
へ力ふまゝ〳〵ゝこゝ上ゝゝば身をのゝらゝゝるその拍子
刀ハまゝふ鞘ゝ〳〵ゝるゝを手ゝゝくゝゝりて重蔵ハ野中ゞ
ゝゝさゝゝ四五寸ゝゝゝり切ゝゝふゝ松六ハまゝこを
怨ゝ〳〵声高く汝よゝ〳〵も人を謀り我ゝもゝで殺さん
とハ一度ゝらぞ二度迫も人を悩る雪の夜の汝ゞ罪も

降り積る雪のかゞやの散しつゝ罪の次弟の捨札を手早く引ぬき打捨ゝ腕立ゝなと重藏ハなをも尖く切付ゝ野中の松ハ最初より急所の痛手ハ引きもきりへゝよろめく所を重藏ハ起しもせらゝゝゝゝゝあをらをうけて乳の下ゝでうら竹割の野中の松ハ寒紅梅の散りうる雪より先ハ消ハ其ゝゝ重藏松六が死骸を田なる畦へ蹴落し又ゝ鞘ハ袖のあゝひとゝゝ拂ひて徐ゝと行んとする時しもあと一村茂る樹立のうげハ始終伺ふ一固の武士深網笠ハ面を色ゝ伺ひ居るとハ露ならぬ茂木浦あとをくらまして立退んと

010190508124

きくりしとる旅客暫く待玉ひと声うけらるゝて重藏ハ
南無法ことの爰ハ顕ましとりのをも言ハ切付るべ右
へちらひ左へ流し早ハりなる某そ御辺ハつくを
せむるハあらぬ武士ハ互ハない哀ハいさくろ御辺ハ
つくありとるいろで口外るをへるや気づろい玉ある
義ハ依て人をるやめきりどりるもものふの習ひ
ハあるべ少しも御辺のちづるハあらぬと言葉せ
くとる諭せば茂木浦きて少しくハてろも今ハお
ちろるろん双をひるてこの後又此ものふと如何ゐ
るやそハ又次の五号を見て考るべし

明治十年
月　日御届

東京

賣捌人　福田熊治郎
長谷川町千番地

著人　平民　羽田富次郎
第六大區小區本所外手町二十二番地

出版人　平民　浦野淺右工門
第十一大區一小區寺島村四十五番地

賣捌人　平民　森屋治兵衛
馬喰町二丁目

平民　恵比壽屋庄七
照隆町